

## 人口の高齢化と移動

大友 篤

昨年の12月にウィーンで開かれた「人口の高齢化と生活様式の変化」に関する国際専門家会議に出席した。この会議は、環境、エネルギー、食糧、人口などの世界的な諸問題を学際的な見地から研究しようという目的で、日本を含む先進諸国の資金で運営されている国際応用システムズ・アナリシス研究所の主催によるもので、ソ連、東欧を含む欧米諸国およびオーストラリア、メキシコなどから約30名が参加した。日本からは私が唯一人参加したが、参加者は、地理学、経済学、社会学、人口学、社会福祉論、医学など種々の分野にまたがり、主として人口研究に従事している人たちである。

3日間の会期中、各国の人口事情についての報告がなされたほか、出生、死亡、人口移動、家族、社会保障の5テーマに分かれて討議がなされ、高齢化にともなう諸々の人口問題が明らかにされた。この席上、とくに関心を引いたのは、日本における平均寿命の急上昇である。すでに日本の平均寿命は世界最高水準に達しているが、1950年代の初めにやっと50年をこえたばかりであるのに、30年ほどの間に、男子75年、女子80年に到達しようとしていることは、かつて日本よりも高水準であり、現在は少し低水準で伸び悩みの状態にあるヨーロッパ諸国の平均寿命と比べると、非常に対照的であり、これらの国々の人口専門家にとっては大きな関心事であるわけである。

この点に関しては、私はかならずしも専門ではないので、日本の平均寿命の急上昇の理由を十分には説明ができなかったが、平均寿命というのは、当該年次に出生した者が、その時点の年齢別死亡率がそのまま継続した場合に何年まで生存できるかということであるので、長命になったということばかりでなく、乳児死亡率の低下が、平均寿命の上昇には大きな貢献をしている点を強調した。つまり、日本の医療水準の上昇が最大の理由ということになる。

平均寿命の上昇は、当然のことながら、人口自体の高齢化をもたらす。ヨーロッパ諸国では、すでに高齢化社会に突入しており、それぞれの国における社会保障や社

会福祉などに大きな影響を与えており、種々の問題を生み出していることが紹介されたが、私は、日本の高齢者の移動パターンに特筆すべき変化がみられていることを報告した。

それは、人口移動の年齢別移動率をみると、1970年から80年の間に、全般的にほとんどの年齢層で低下しているのに、65歳以上では上昇しているという点である。しかし、そればかりでなく、65歳以上人口の移動率が、60～64歳や55～59歳の年齢層のそれよりも高くなっているという点である。これらは1970年には、大都市地域以外では、まったく認められていなかった事実なのである。

1980年における高齢者の人口移動パターンのこのような変化は、しかも、全国平均としてばかりでなく、ほとんどの都道府県についても認められ、いわば、全国的規模で観察できるのである。もちろん、このような傾向は、欧米諸国では、1960年代から認められており、日本はむしろ遅れているということになる。いずれにせよ、従来、高齢者ほど人口移動の移動率は低いと考えられていたのが、大きく覆されたことになる。しかも、このような傾向は、とくに女子人口において顕著であるという点であり、女子の平均寿命が男子のそれよりも長いということとも関係がありそうである。現在のところ、このような現象がどのような理由で生じたのかは明らかではなく、今後の研究によることになるが、人口の高齢化が、日本人の生活様式に大きな変化をもたらしてきていることは確かである。

この会議では、このテーマに関して国際共同研究の必要性が強調され、個別のテーマごとに国際共同研究プロジェクトが発足することになった。私は高齢者の移動に関する国際共同プロジェクトへの参加を要請され、合衆国、イギリス、ポーランド、メキシコ、日本における高齢者移動の比較研究プロジェクトが追々スタートすることになる。

(宇都宮大学)